

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理事業は、国（1,750,000円）、県（875,000円）の補助金を受け、平成2年5月8日から平成3年3月30日まで実施した。

3. 調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林 茂吉
社会教育課長	吉田 和子
町史・文化財係長	多田 威
町史・文化財係	坪田 幹男・桜井 信枝・高崎 直成
発掘調査担当者	坪田 幹男・高崎 直成

4. 本書の執筆は調査担当者が下記のように分担した。

I・II-1・3・III・IV・VII・VIII・IX章：坪田、II-2・V・VI章：高崎。

遺構図版作成は小林登喜枝、土器実測図版作成は高崎があたり、土器拓影図作成には整理事業参加者全員の協力を得た。また本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5. 各遺跡の調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏、機関よりご指導、ご協力を賜った。

荒井幹夫、今井堯、内田賢司、神木繁嘉、小出輝雄、駒井和久、佐藤正志、笹森健一、谷井彪、塚田政子、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、和田晋治、
(敬称略)

埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町遺跡調査会

6. 発掘調査ならびに整理事業参加者は下記の皆様である。銘記して、謝意を表したい。

(発掘調査参加者) 敬称略

会沢泉、浅野昭夫、新井唯二、飯塚泰子、石川与一、井坪志津子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曾根キク子、太田明代、奥村友子、遠田つる、笠原英子、金子君子、神木光治、木村美和子、小林こずい、佐久間ひろ子、佐藤至一、柴田しづ子、鈴木英子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、田村福次郎、中嶋末子、中島優子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、松木美恵子、山内栄美子、山下一枝、弓和子、若林紀美代

(整理事業参加者) 敬称略

石垣ゆき子、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、中田藤子、中野和子

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑 $\frac{1}{60}$ ・炉 $\frac{1}{30}$ ・土器実測図 $\frac{1}{4}$ ・土器拓影図 $\frac{1}{3}$ とした。
2. 遺構図中の細数字は床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の規準は次のように定めた。
小礫：2.0mm以上、粗砂：0.2～2mm、細砂：0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

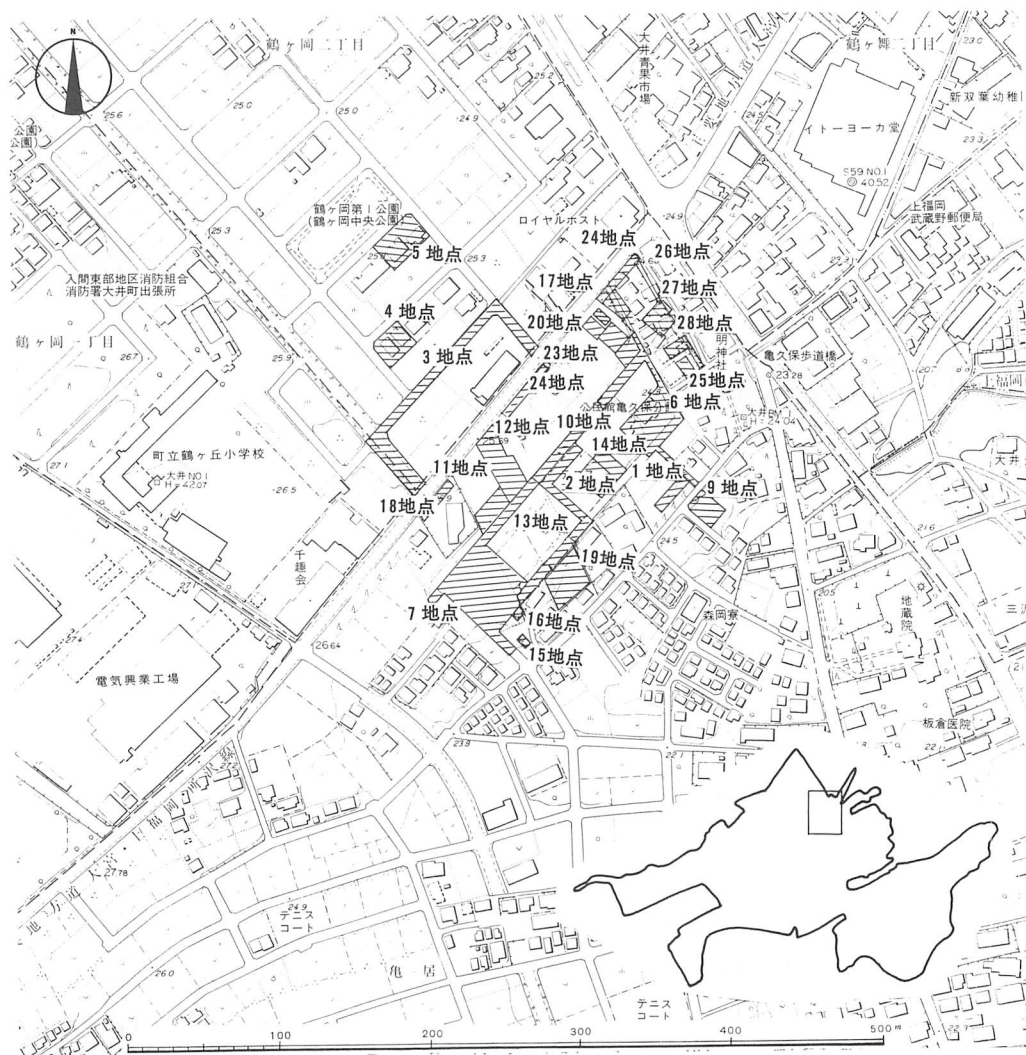
○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8kmで現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、1978年以来国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成2年度の調査は、下記の17箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

No.	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積	調査原因	調査期間
1	本村遺跡第12地点	大井町大字大井240,241～4	340㎡	個人住宅建設	2.5.8～5.9
2	亀居遺跡第20地点	〃 亀久保1,001-3	118㎡	個人住宅建設	5.21～5.25
3	江川南遺跡第2地点(試掘調査)	〃 東久保1丁目120-3	580㎡	集合住宅建設	5.28～5.31
4	西ノ原遺跡第43地点	〃 苗間153-3	272㎡	個人住宅建設	6.26～7.9
5	本村遺跡第13地点	〃 大井180	428㎡	個人住宅建設	7.25～7.26
6	東台遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井713-4,5	3,048㎡	資材置場設置	8.1～8.4
7	苗間東久保遺跡第16地点(試掘調査)	〃 苗間645-1	390㎡	集合住宅建設	8.21～8.24
8	亀居遺跡第23地点	〃 亀久保1,001-14,15	160㎡	個人住宅建設	9.3～9.10
9	東台遺跡第17地点(試掘調査)	〃 大井621-1	1,470㎡	診療所建設	9.5～9.12
10	小田久保遺跡第1地点(試掘調査)	〃 大井1,223-3	694㎡	資材置場設置	10.12～10.18
11	本村遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井110-2	230㎡	学童保育所設置	11.6～11.13
12	亀居遺跡第28地点	〃 亀久保995-6	475㎡	個人住宅建設	3.1.24～2.1
13	亀居遺跡第26地点	〃 亀久保1,001-14	259㎡	個人住宅建設	2.14～3.15
14	亀居遺跡第25地点	〃 亀久保995-7	162㎡	個人住宅建設	3.12～3.16
15	苗間東久保遺跡第17地点(試掘調査)	〃 苗間636-4	583㎡	駐車場設置	3.12～3.15
16	中沢前遺跡第2地点	〃 苗間221-3	1,333㎡	個人住宅建設	3.14～3.18
17	東台遺跡第18地点(試掘調査)	〃 大井588	20,000㎡	集合住宅建設	3.25～3.29

本報告では、時間の制約上No.12までにとどめたが、3.江川南遺跡第2地点、7.苗間東久保遺跡第16地点、9.東台遺跡第17地点、11.本村遺跡第16地点の本調査の概要を参考資料として巻末に掲載した。

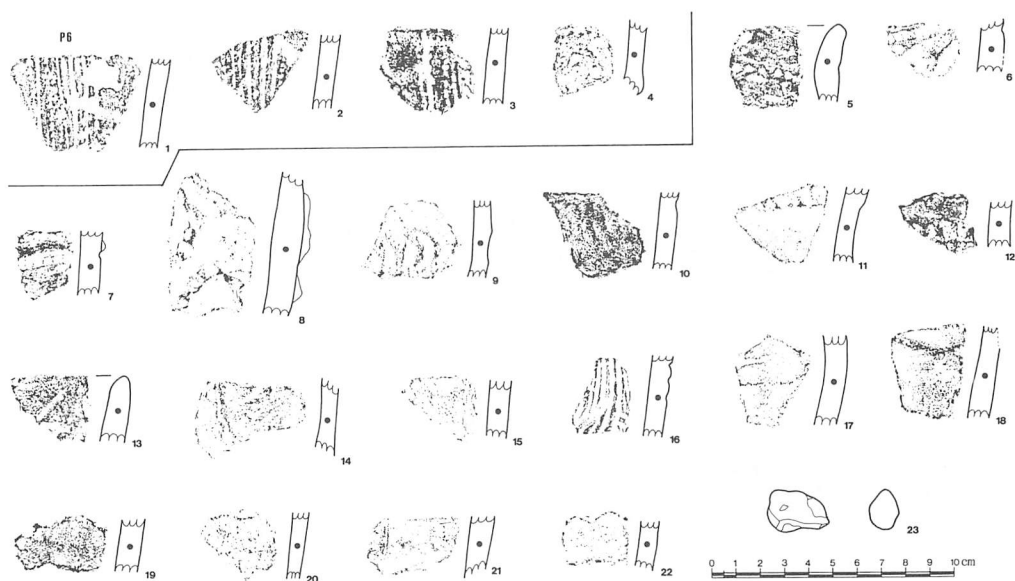
VIII. 亀居遺跡



第41図 亀居遺跡の地形と調査区 (1/5000)

1. 遺跡の立地と環境

亀居遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐ福岡江川の谷頭部に位置している。標高25～26m 現谷底との比高差は5 mを測る。本遺跡をのせる北側の台地は急傾斜をなすが、対岸の南側は緩やかな斜面を形成している。この緩斜面上には江川南遺跡が立地する。遺跡周辺は、土地区画整理事業により区画道路が縦横にとりつけられ、宅地化が徐々に進んできている。1972年に最初の発掘が行なわれ、これまでに19地点で調査が実施され、縄文時代中期前半の住居8軒、屋外埋甕2、集石土坑25、土坑102、ピット302が確認されている。遺物は阿玉台式、勝坂式土器が主体で一部五領ヶ台上層期の土器片の出土もある。加曽利E式土器を伴出する遺構の検出はこれまでのところ皆無である。確認された住居等の重複、切り合いはない。



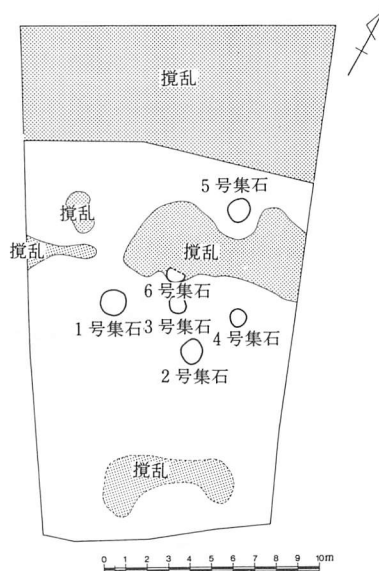
第47図 亀居遺跡第23地点 6号ピット・遺構外出土土器 (1/3)

VIII-3. 亀居遺跡第28地点

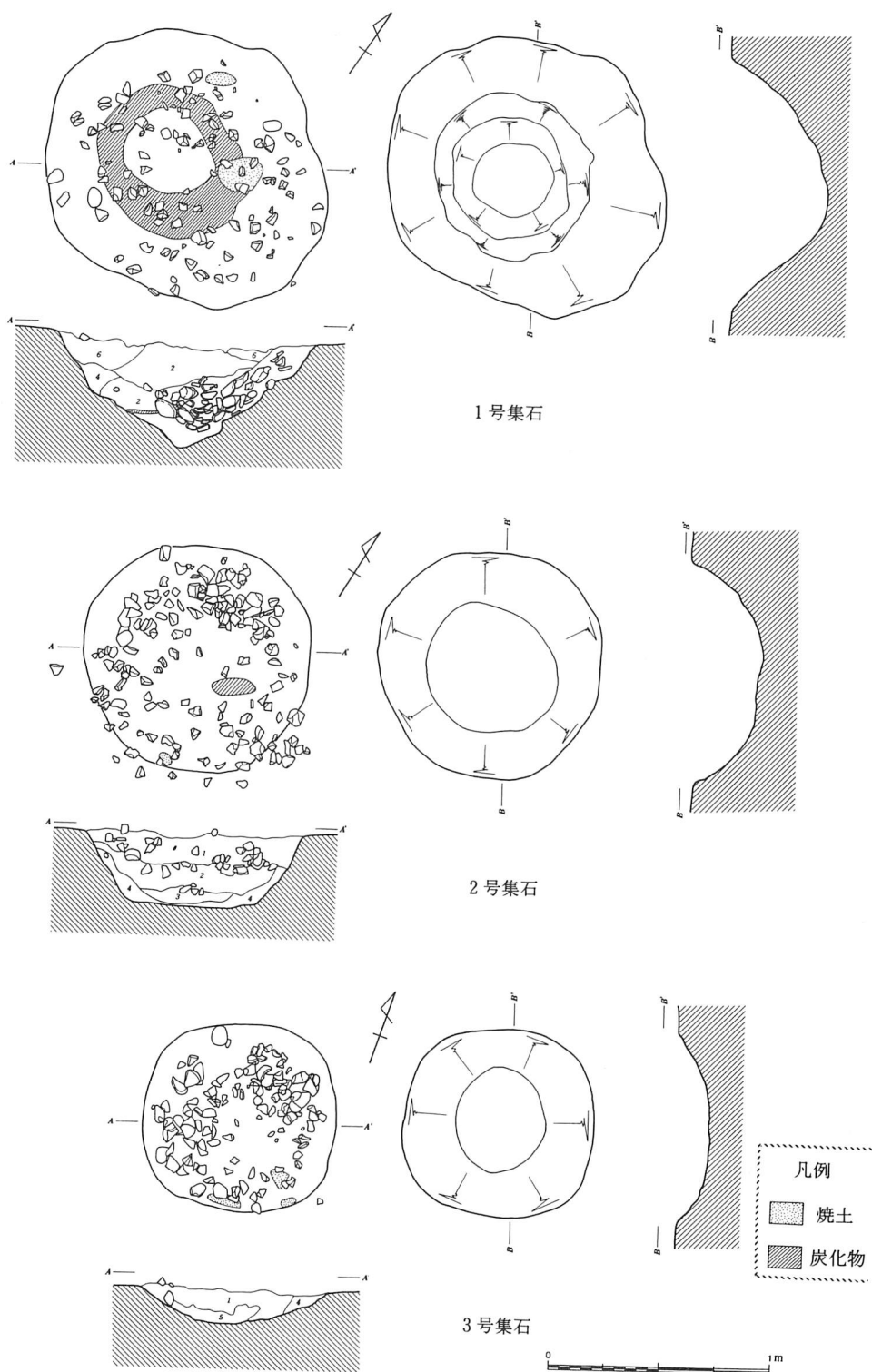
本遺跡の調査区域ではもっとも北東部にあたり、遺跡の範囲確認という点では重要な位置づけで調査にのぞんだ。調査の原因が土地区画整理事業による専用住宅の移動に伴うもので、調査前の現況は建物の基礎が撤去されたままの状態で、とうてい重機をいれない限りは表土の除去は困難であった。1991年1月21日に重機を入れ、24日から人力で遺構確認のための精査を開始した。その結果、調査区の北側部分は既存住宅の地下室部にあたり遺構確認はまったく不可能であった。そこ以外にも多少の攪乱があったが縄文時代中期の集石土坑6基（うち1基は攪乱下から）を確認した。また包含層を徐々に掘り下げていったが新たな遺構の検出はなかった。1月25日から集石土坑の測量を始め、2月1日にすべての礫をとりあげ調査を終了した。

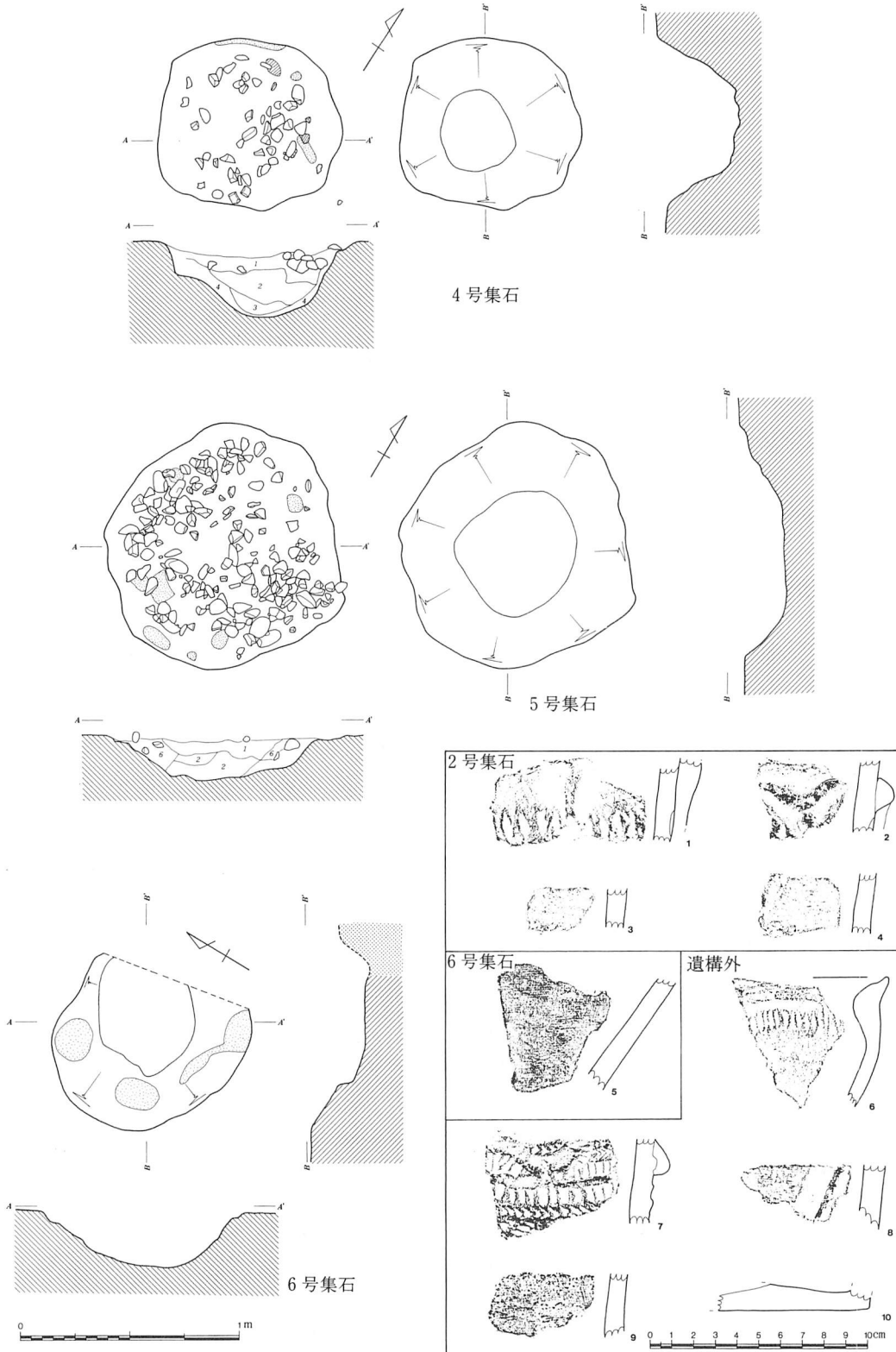
1号集石土坑（第49図）

集石プランは長径125×短径120cm、深さ38cmの円形を呈する。集石構成礫には、二次的な破損の認められるものが多く、表面に黒色の付着物が観察されるものがある。土坑プランは140×125cmの楕円を呈し、深さ52cmを測る。その断面は摺鉢状で底面は比較的狭い。中層に炭化物片を多く含み、東壁面と一部北壁面が焼けている。礫は東からの流入が顕著で西壁側では希薄であった。出土遺物はない。



第48図 亀居遺跡第28地点 遺構配置図 (1/300)

第49図 亀居遺跡第28地点 集石 1 ($\frac{1}{30}$)



第50図 亀居遺跡第28地点 集石 2 ($\frac{1}{30}$) ・出土土器 ($\frac{1}{3}$)

2号集石土坑（第49図）

集石プランは長径115×100cmのほぼ円形をなし、深さは30cmを測る。礫は中層に集中するがそれほど濃密ではない。土坑のプランは110×105cmの円形を呈し、深さ33cm。断面は鍋底形を呈する。底面はほぼ平坦だが炭化物が多量に遺存しているところから、底面に意図的に置かれたことがうかがえる。南壁面の一部が焼けている。1層より縄文土器片が4点出土している。

3号集石土坑（第49図）

集石プランは長径80×70cmで、深さは10cmと浅い。プラン上面での礫は環状に検出されたが層厚はきわめて薄い。土坑の規模は95×90cmの円形、深さ17cmで、断面は皿状を呈して浅い。底面は平坦だが狭い。壁はゆるやかに立ちあがり南壁面が焼けている。

4号集石土坑（第50図）

集石のプランは長径75×70cmの円形を呈し、礫はほぼ環状に確認された。深さは15cm。礫、炭化物は、ほぼ1層に集中しており、2層の中位には若干ながら焼土粒が含まれている。土坑プランは長径85×短径80cmの円形、深さ30cmを測る。断面形は摺鉢状を呈している。底面はやや凹凸がある。北壁と東壁面が焼けている。

5号集石土坑（第50図）

集石プランは長径105×短径100cmの円形で、中央部には薄く環状に礫がめぐっている。深さは10cmと浅い。土坑プランは径115cmの円形を呈し、深さ19cmを測る。断面は北壁が緩やかに立上っているが、概ね浅い鍋底形をなす。底面はやや凹凸がある。南壁面寄に焼成面が遺存している。

6号集石土坑（第50図）

既存住宅の基礎部分下にあり、北側 $\frac{1}{3}$ は調査不能。集石プランも上面を攪乱により大破されていたため確認できなかった。土坑のプランは径80～90cmの円形を呈するものと思われ、深さは25cmを測る。南壁面が焼け炭化物を含んでいた。縄文土器片1点が出土している。

1～6号集石構成礫は、二次的な破損が認められるものが多く、スス状の付着物のつくもの、また、赤色等に礫表面が変色したものも多く認められたが、本報告までには、時間的制約があり、集石構成礫について個々の観察が行なえていない。

（覆土）1. 礫を含む黒褐色土。2. 焼土粒と炭化物を含む黒褐色土

3. ローム粒子を含む暗褐色土。4. ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。

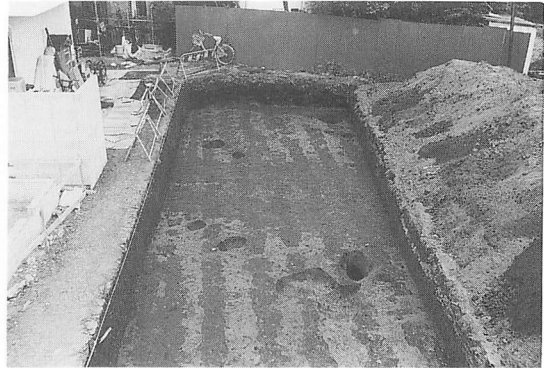
5. 焼土粒等を含まない黒褐色土。6. しまりの強い暗褐色土。

2. 亀居遺跡第28地点出土土器（第50図）

1～4は2号集石の1層より出土した。1は断面三角形の隆帯をもち、地文に爪形文を施す阿玉台式土器。2も多量の雲母末を含む該期土器。5は6号集石出土。無文部土器。胎土は緻密。6～10は遺構外からの出土土器。6は口唇部直下に細かい爪形を施し、内湾する阿玉台式土器。7は巾広のキャタピラ文と三角押文が多用された勝坂Ⅱ式土器。



調査風景



調査区（北側）



同上



調査区（南側）



調査区近景



遺構プラン



遺構プラン



調査風景

図版10

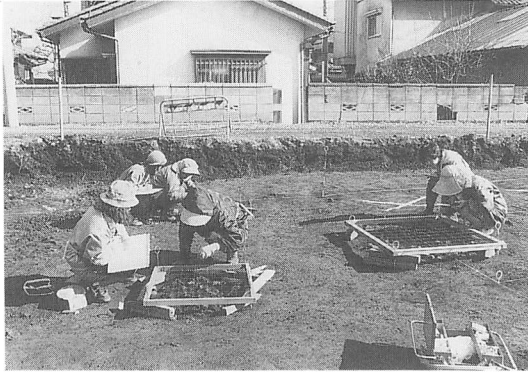
第28地点



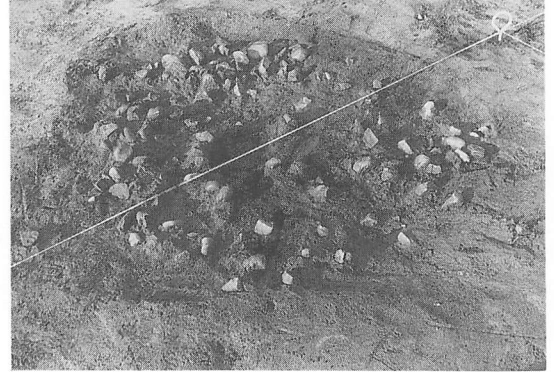
1号集石



1号集石断面



調査風景



2号集石



3号集石



4号集石



5号集石



完掘状況